

# 哲学・思想の基礎

## 学科共通科目(2017年度)

第13回 倫理的な正しさとは  
何か

コミュニタリアニズムの立場

質問に対する解答

# リベラリズムとリバタリアニズムから見た 功利主義に対する評価

- 授業の概要プリントの内容に関して質問があります。6ページ目「(1)ロールズとノージックの立場～」5段落目に書かれている「二人とも功利主義にはっきりと異議を唱え、それが人格間の区分を否定していることを根拠にして拒否している」という一文なのですが、「人格間の区分」とは一体どのような区分でしょうか。もし道徳的人間性による立場の対立が功利主義を否定する根拠であるなら、私はロール

ズとノージックの功利主義へ対する異議に反感を抱く。なぜなら、功利主義によって19世紀から「1832年革命」ともいわれるリフォーム＝アクト成立をはじめ、救貧法改正や地方自治法制定、教育制度改正が行われたという合理的かつ道徳的な成果があるからだ。さらに、功利主義によるこれらの動きには福祉的要素も含まれているため、ロールズの考え方と功利主義は反するどころかむしろ重なる部分があるのではないだろうか。

- 「人格間の区分」とは、功利主義が異なる人格(人)であっても、それを幸福計算の1単位として考えることです。社会全体の幸福の集計においては、個人の差異は無視されるということです。功利主義には歴史的な功績がもちろんあります。場合によっては、社会福祉に関してロールズと功利主義は一致することもあります。

# カントに対するコミュニタリアニズムからの 批判

- カントの考えでは、「あなたに好都合のときだけに約束を守れ」というような格率は成り立たないとされている。では、カントは彼が言うように私たちの友達が言えに逃げこんで人殺しがやってきても、正直に友達を差し出すことが正しいというのだろうか。少なくとも私はそうはできない。正直なことを言うのが正しいとしても、その状況や周りに応じて嘘をつくことも正しいであろう。

- 殺人者に負われているというような非常事態にはカントの「ひとは嘘をついてはいけない」という定言命法が成り立たないことがあります。これはあくまで例外として考えるべきでしょう。原則としては定言命法(道徳法則)は普遍的に成り立つと考えるべきです。

# リバタリアニズムとリベラリズムの関係

- 私は自由放任主義をとるリバタリアンと、リベラリズムの立場の福祉国家支持者のゲイの権利や政教分離といった問題に重なる見解を持つというのには理解できない。自由放任主義と福祉国家は人々の権利に対する見解は逆になるはずであるからだ。

- 社会福祉政策では、リベラリズムは格差を是正するような社会福祉政策を採りますが、リバタリアニズムは最小限の社会福祉政策しか認めません。この点では両者は対立します。しかし、両者とも個人の権利を重視しますので、ゲイの権利や政教分離には賛成します。



# コミュニタリアニズムの弱点

- …コミュニタリアニズムの考え方が我々の生活空間の中に用いられると、共同体を1単位として見てしまうため、その共同体に属さない者は排除対象となると言えるでしょうか。質問の理由として、所属のアイデンティティが形成されると他の共同体を排除してもおかしくないと考えたからです。私は対象になると考えます。理由として、日本での在日朝鮮人の方々へのヘイトスピーチなどは「日本人」という共同体に属さないから生じていると考えるからです。

- 保守的なコミュニタリアニズムにはこの傾向があります。これはコミュニタリアニズムの弱点とも言えます。しかし、サンデルのようなコミュニタリアニズムではリベラリズムに近いため、このような排除はしないでしよう。

# 道徳的人間になること

- カントの定言命法は、無条件に何かをすることであり、例えば、おぼれている人がいたら後先考えずにただ助けに行くことである。これをカントは道徳法則の真正な表現だと考える。しかし、マッキンタイアはこの定言命法を批判した。彼は、人間が道徳的人間になるのではなく、命令が人間を道徳的人間にすることに〔を〕批判した。私は最初、人間が結果的に道徳的人間になるのなら、どちらでも良いと考え

ていた。しかし、マツキンタイアは、道徳的人間になるまでのプロセスを重視した。可能態から現実態へ移行することを必要としたのだ。マツキンタイア思想は不当だとされたり除去されてしまうが、結果だけでなく、そこまでのプロセスや、人間の可能性に重要視した思想は、カントとは違った観点をもった道徳の考え方であることがわかった。

- 良い点に気づいています。人間を命令としての道徳に従うのではなく、倫理学によって道徳的人間になることを求めるマッキンタイアの思想はカントにはない考え方を示しています。マッキンタイアは道徳をいわば教育のように考えています。

## アリストテレスの倫理学について

- アリストテレスの徳論の中で、「アリストテレスは単に個人の理論家として見なすのではなく、一つの長い伝統者〔伝統の代表者〕と見なされる」と合ったが、なぜアリストテレスは「一つの長い伝統者〔伝統の代表者〕」と見なされるのか。その理由や由縁がわからないため、教えてほしいと思った。
- 現在まで「徳」の重要性はアリストテレスの思想として伝えられてきたからです。これは現代では「徳倫理学」として研究されています。

- 善と徳において、「『道徳教育』は、一つの『感情教育』である」とあったが、それは、道徳教育が、人の感情などを考えたり学んだりする教育であるからなのか。
- アリストテレスでは、徳を身につけることが重視され、それはいわば教育と見なされます。その際に、徳は感情のような側面をもつということです。人の感情を考えたり学んだりすることではありません。

# アリストテレスのプロネーシスについて

- 善そのものとは何か。「善くあることにおいて善く行為する」ことだとアリストテレスは言う。確かにそうだ。世間には一般的に「善い」とされる行為がある。電車やバスなどでお年寄りの方に席をゆずることや、道に落ちていたゴミを拾うことなどが例にあげられる。このように「善い」とされる行為を行うことが善なのだ。このなにかが善なのかという知識を所得〔取得〕することによってエウダイモニアが達成できる。諸得〔徳〕のなかで中心的な徳は「プロネー



シス」であり、その言葉が特徴づける人は、自分にふさわしいことを知っている人が、誇りをもって自分にふさわしいことを要求する人である、という言葉のいみが理解できなかった。次の授業でわかりやすく説明していただきたい。

- 「熟慮」と訳されるプロネーシスの意味は難しいものです。状況に応じて適切な判断をし、行動することができる倫理的な能力です。これは習慣によって身につけられるとされます。